

アンケート回答（計6通）

1. 2005年発行の「2010年代の光赤外天文学」が役立ったと思われる事例 （細かい例でも結構です。なるべく具体的にお願い致します。）

学術会議大型計画マスタープラン作成時（2009年）に、光赤外からTMTとSPICAが両方とも支持されるために、この文書が必須だったと考える。なぜ両方が必要なのかが、理解できるように書かれていた。

大型計画（TMT及びSPICA）を明確に位置付けたことで、プロジェクト予算化に向けての強力なメッセージを発信できたこと。これは学術会議における大型計画の推薦に結び付いたし、光赤天連声明の裏付けともなった。

一方中小規模計画の重要性もこの冊子にかかれており、成果の社会への還元・若手教育の環境整備に大きく役立ったと思う。

とにかくこのような活動がコミュニティ主導で起こり、このような冊子にまとまったこと自体が大きな成果であり、対外的にも大変大きな意味を持ったと思います。

このような活動を通して共同研究が促進されたケースがあります。

それぞれの分野のこれからの展開の良いレビューになっていたの
で熱心な学部生に配って勉強してもらったりしました。

光赤外線ロードマップの絵一枚は、いろいろなところで利用
できました。このようにわかりやすい絵は、大変に重要だと思
います。

2. 「2010年代の光赤外天文学」の改訂版を出す場合に求めたいこと

将来計画に具体的なプロジェクトが書かれる場合、実際に参加する研究者（院生は含まない）名を、

- －実行部隊、つまりプロジェクトの遂行に責任を持って参加する研究者。各自の主プロジェクトであること。
- －賛同、支援するだけで、プロジェクトの遂行に責任をもたない研究者

に分けて明記すべきである。それでなければ、実施体制が十分でない
と判断される可能性が高い。

日々進展する科学成果を取り込んで、2020年代の天文学になすべきこと
を取りまとめることは言わずもがなだが、大切なものは、10年ぐらいで
ぶれることはないし、まだ実現していない計画も多々あることを考え
ると、今のロードマップをさらに強化する、説得力を高める、という
ことを基本方針にすべきである。

また「全体ビジョン」は光赤天連全体で共有されなければならない
のでそれなりに時間が必要。特に「何を最優先で実現すべきか」、に
ついては十分に議論を尽くすことが必要と思う。

再び、理論グループ（国立天文台理論部も）の貢献も是非期待したいです。

多波長のいろいろな動向とも切り離せないと思いますので、
そういう人たちにも議論には入ってもらいたいと思います。

このようなことが政治的に可能なのかわかりませんが、
アメリカのデカダルサーベイの報告のようなトータルの予算プロファイルに
ついての大雑把なサマリは入れられないでしょうか。
難しいでしょうが。。

2010年代の光赤外天文学では分野ごとにサイエンスが並列して書かれていますが、各分野でトップサイエンス（1,2つ）を選定し、明記するべきであると考えます。また、大型プロジェクトである TMT および SPICA についても同様にそれぞれのプロジェクトのトップサイエンスを明確にすると良いと思います。また、このサイエンスをどのように実現していくか（実現可能性を高めていくか）という道筋を合わせて示すことが必要だと思えます。

2に直接は関係しませんが、

「トップサイエンスをコミュニティ全体で推していく努力が必要」だと思えます。

前回同様、スペースと地上とが融合して手を携えた形での大きな展望を語るものとしていただきたいとおもいます。
